

広範囲腱板断裂に対する鏡視下手術

腱板断裂手術の歴史を紐解くと、1911年にCodmanが棘上筋腱損傷に対する修復術について最初に発表したのがその始まりです。その後McLaughlin法に代表される経骨孔縫合法が開発され、長らく腱板断裂手術のゴールドスタンダードとされてきましたが、それに対して大きな変革をきたしたのは、日本で発明された関節鏡です。これにより腱板断裂手術は劇的な変化を遂げ、直視下手術の報告より遅れること80年、ついに鏡視下腱板修復術が開発され、その後30年以上にわたり進歩し続けています。

その間、臨床成績を向上させるために様々な手術手技が生み出されてきましたが、広範囲腱板断裂に対する答えは依然として確立していないのが現状であり、多くの整形外科医がこれまで再断裂に直面し、その課題に悩まされてきました。再断裂は臨床成績にさほど影響はないともいわれていましたが、最新の研究では肩甲下筋の非再断裂群と再断裂群の比較において、術後2年時は大差なかったものの術後5年時では成績差が顕著となると報告されており¹⁾、なるべく再断裂を避けるような手術手技が望まれます。

本特集号では、広範囲腱板断裂の診療に対して並々ならぬ情熱を燃やす、国内の第一人者の先生方にご執筆を賜りました。腱板筋前進術、大腿筋膜補強術、下部僧帽筋移行術、人工生体材料を用いた補強術、Ex-medialization法、肩上方関節包再建術、肩甲下筋完全断裂に対するsuture bridge法、biceps rerouting法など、いずれの術式も独自の視点で開発された想像力に富んだものであり、わが国から世界へ発信できる誇るべき内容です。またこれらの術式の開発根拠となる最新の解剖学的知見と術後成績を支える専門的なリハビリテーションについても詳説が加えられています。それぞれの執筆者の熱意が文章を通じて伝わってくる充実した内容となっており、広範囲腱板断裂に対する鏡視下手術の最前線についてご理解いただけるものと確信しています。

ご多忙のなかご執筆をお引き受けいただいた先生方にはこの場を借りて深謝申し上げます。本特集が広範囲腱板断裂の克服を目指す多くの整形外科医の道標になれば幸いです。

(谷口 昇)

文献

- 1) Yau WP et al : Differences in clinical outcomes between patients with retear after supraspinatus tendon repair and those with intact repair at 5-year follow-up. Am J Sports Med **52** : 1040—1052, 2024